

2013年度 常設展第4期

# 織田一磨の版画

## 大正・昭和の都会風景

2014年1月5日(日)～3月30日(日)

織田一磨（おだかずま、1882-1956）は、1900（明治33）年前後から1956（昭和31）年にかけて活躍した石版画家（リトグラフ作家）です。北斎を中心に浮世絵版画を研究し、それをベースに制作した版画家でした。画題のほとんどは風景で、浮世絵版画同様に、時代の移り変わりを新鮮に表現していることが特徴です。

今回の展示では、まず織田が1916年から19年に制作した初期の代表作である『東京風景』と『大阪風景』の連作（共に20点連作）から、幕末から明治初期の面影をのこす風景を描き出した作品と、それとは対照的に近代的な建物や交通手段などが見られる風景を描いた作品を織り交ぜて紹介します。それらは散策によって江戸の名残をつづった、永井荷風の随筆『日和下駄』（1915年出版）で描写された世界を絵によって表わした作品といえます。

つぎに小林清親の「光線画」を思わせる、大阪や京都の夜の光景を描いた『都会夜趣』（4点連作、1919年）を紹介します。この連作には、都市の内側に分け入る観察者としての織田の視線を感じることができます。

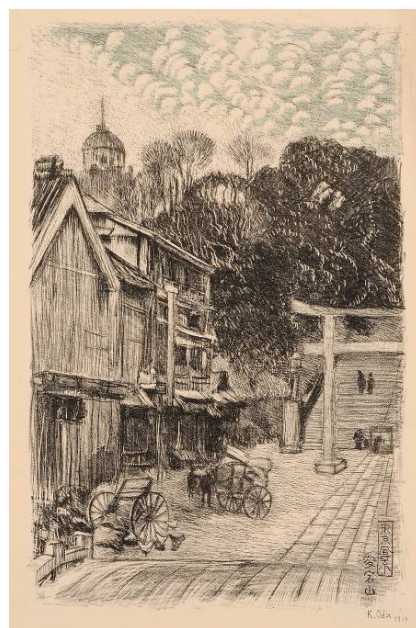
つづいて、関東大震災（1923年）後の復興事業によって生まれた、新しい東京の姿を描き出した『画集銀座』（第1輯、第2輯、ともに6点連作）や『画集新宿風景』（6点連作）などを紹介します。これらには、江戸や明治初期への郷愁を振り払い、新しい時代を見つめる織田のまなざしが読み取れます。

大正、昭和の都会風景を想像しながら、あるいは懐かしみながらご覧いただければと思います。

\*織田一磨の出品作品は全て石版画（リトグラフ）です。

『東京風景』より

- 1 あたごやま  
愛宕山  
1916（大正5）年 400×260 mm  
小野忠重コレクション



1

- 2 じゅうにかい  
十二階  
1916（大正5）年 430×185 mm  
小野忠重コレクション
- 3 こふねちようかし  
小舟町河岸  
1916（大正5）年 440×295 mm  
小野忠重コレクション
- 4 やなぎばし  
柳橋  
1916（大正5）年 290×390 mm  
小野忠重コレクション
- 5 わだくらもん  
和田倉門  
1916（大正5）年 280×390 mm
- 6 こひなただいにとどう  
小日向大日堂  
1916（大正5）年 290×435 mm  
小野忠重コレクション

- 7 洲崎すさき  
1916 (大正 5) 年 255×425 mm
- 8 上野広小路  
1916 (大正 5) 年 400×280 mm
- 9 上野之桜  
1917 (大正 6) 年 400×270 mm

『大阪風景』より

- 10 道頓堀どうとんぼり  
1917 (大正 6) 年 435×280 mm



10

- 11 土佐堀川とさぼりがわ  
1919 (大正 8) 年 280×430 mm
- 12 京町堀きょうまちぼり  
1919 (大正 8) 年 290×435 mm
- 13 高津神社こうづじんじや  
1919 (大正 8) 年 430×290 mm

『都会夜趣』(全 4 点) 1919 (大正 8) 年

- 14 加茂川夜景 250×180 mm
- 15 屋台店 160×235 mm



15

- 16 大阪松島遊郭夜景ゆうかく 165×250 mm
- 17 小料理店 210×170 mm
- 18 新橋演舞場 (『新東京風景』より)  
1925 (大正 14) 年  
170×250 mm

『画集銀座』第 1 輯 (全 6 点)

- 19 酒場フレデルマウス  
1928 (昭和 3) 年 270×170 mm
- 20 銀座千疋屋せんびきや  
1928 (昭和 3) 年 170×285 mm
- 21 松屋より歌舞伎座遠望  
1929 (昭和 4) 年 170×280 mm
- 22 酒場バックス  
1929 (昭和 4) 年 170×280 mm
- 23 屋台店  
1929 (昭和 4) 年 170×285 mm
- 24 シネマ銀座  
1929 (昭和 4) 年 270×175 mm

『画集銀座』第 2 輯 (全 6 点)

25 人形売少女  
1929 (昭和4) 年 175×285 mm

26 新橋夜景  
1929 (昭和4) 年 170×285 mm

27 酒場スウリール  
1929 (昭和4) 年 170×285 mm

28 スキヤ橋夜景  
1929 (昭和4) 年 170×285 mm

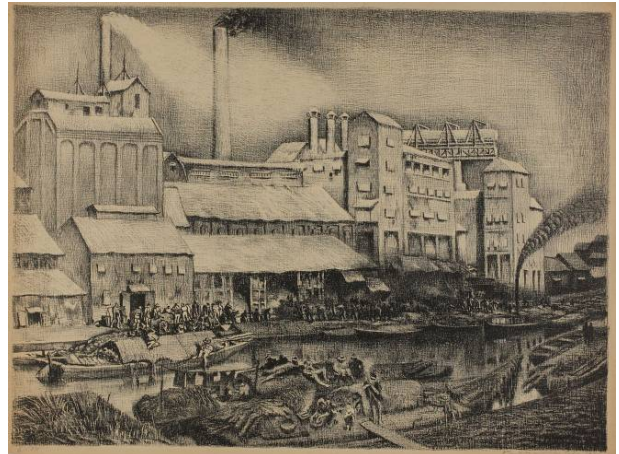
29 銀ブラ  
1929 (昭和4) 年 160×275 mm

30 夜更けの銀座  
1929 (昭和4) 年 170×270 mm

35 花うり娘  
1930 (昭和5) 年 270×170 mm

36 新宿ステーション  
1930 (昭和5) 年 170×280 mm

37 セメント工場  
1930 (昭和5) 年 425×580 mm



37

### 『画集新宿風景』 (全6点)

31 ほていや六階から新宿三越遠望  
1930 (昭和5) 年 175×280 mm

32 新宿カフェー街  
1930 (昭和5) 年 280×165 mm



32

33 武蔵野館  
1930 (昭和5) 年 170×275 mm

34 明治神宮表参道  
1930 (昭和5) 年 170×270 mm

38 新潟の柳 (『画集風景版画』より)  
1931 (昭和6) 年  
310×460 mm

『画集大阪の河岸』より  
1934 (昭和9) 年

39 四ツ橋の柳  
175×125 mm

40 道頓堀川夜景  
175×125 mm

### 哇地梅太郎 (1902-99) コーナー

あぜちうめたろう  
哇地梅太郎は愛媛県出身の木版画家で、「山の版画家」として知られています。最初は山の風景を描い

ていましたが、やがて、自分が山で感じたことを山男のすがたをかりて表現するようになりました。温かみのある作品で多くの人に愛されています。晩年を町田市鶴川ですごし、この美術館の建設にも大いに貢献しました。

『山岳版画集』より 白根山  
1946 (昭和 21) 年  
木版多色 165×240 mm

『日産カレンダー』より 一年生  
1957 年 (昭和 32) 年  
木版多色 270×267 mm

樹林をとぶ鳥  
1967 (昭和 42) 年  
木版多色 493×375 mm

枯木のいさかい  
1980 (昭和 55) 年  
木版多色 388×288 mm

うきよえたまたまはこ  
**浮世絵玉手箱**

明治期に活躍した、小林清親(こばやしきよちか、1847-1915) の作品をご紹介します。

伝統的な浮世絵技法の中に、西洋美術の陰影法や明暗法を取り入れた清親の版画は「光線画」と呼ばれ人気を博しました。中でも、1876 年から 1881 年に出版された『東京名所図』と称される一連の風景画群は、開化の風物をノスタルジックに描き出した、代表的な作品です。今期はその中から、東京の新名所を描く「新橋ステーション」「海運橋(第一銀行雪中)」など 3 点を展示します。

一日の中で移ろう日の光、闇に浮かび上がる都市のあかり、雪景色など、さまざまに凝らされた光の表現をお楽しみください。

※ 技法は全て木版、多色摺り

新橋ステーション

1881 (明治 14) 年 203×302mm



海運橋(第一銀行雪中)

制作年不詳 220×306mm

浅草蔵前夏夜

1881 (明治 14) 年 206×316mm

## 春の特別展のご案内!



2014年4月12日(土)~6月15日(日)

「パブロ・ピカソ

—版画の線とフォルム—」

**91年の生涯にピカソが制作した版画の数は、現在確認されているだけでも、なんと2000点超。**

**初期から晩年に至る版画約180点を選び、その魅力をお伝えします。**

**ご期待下さい。**

町田市立国際版画美術館 2014年1月5日発行

<http://hanga-museum.jp/>